

「解答例」

| | |
|--|---|
| 選抜区分 | 2021年度 (選抜区分：学校推薦型選抜) 文学部 比較文化学科 (科目名：小論文) |
| <p>問題Ⅰ (標準的な解答例)</p> <p>問1 1842年に行ったアメリカツアーで自分の資金を使いすぎてしまった作家のチャールズ・ディケンズは、大家族を養うための現金を早急に必要としていたので、新しい小説を書いてその原稿料で現金を得ようと考えたのである。そうして書かれた小説『クリスマス・キャロル』は1843年に出版され、初版の6000部は1週間で売り切れ、1年後には合計で15000部が売れたため、ディケンズはある程度の現金を得ることができたが、それは彼が考えていた額よりもはるかに小さなものであり、ディケンズは不満をもらす結果となった。(246字)</p> <p>問2</p> <p>①ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』は、主にロンドンに住む中産階級の人々に対して、貧しい人々が置かれている状況に関心を向けさせ、そうした人々があちこちにいることを気づかせることで、そうした人々に対して寄付という形で共感を示す必要があるという認識が、社会に広がっていくという影響力を持った。(146字)</p> <p>②自身も貧困家庭の出身者だったディケンズは、貧しい子どもたち向けの学校を訪問するなど、貧困状態にある子どもたちの境遇に対して共感を持っていたため、現在では裕福になった自分よりも恵まれない人々の力になりたいと強く願っており、そうした面で自分の書いた小説が影響力を発揮することを望んでいた。(142字)</p> <p>問3 スクルージは自分より恵まれない人々への思いやりを全く持っておらず、自分が一生懸命働いて稼いだお金を他人に寄付しようなどとは考えていなかった。それは彼が、当時の他の人々と同様に、刑務所や救貧院があれば貧民の救済としては十分であると考えていたためであるが、彼は貧しい人々にはそれ以上のものが必要であること、すなわち寄付という形で共感を示すことが必要であると気づき、より思いやりのある人物に変化した。(197字)</p> <p>問4 (出題の意図) 別紙</p> | |
| <p>問題Ⅱ</p> <p>問1 (標準的な解答例)</p> <p>「テーマを聞く」とは、あらかじめ用意したテーマに即して、必要なことを質問していく方法である。一方で、「人生を聞く」とは、その人の人生の節目にそって経験を聞いていく方法であり、語られる歴史をまるごと受け止める方法である。筆者は岐阜県で野原さんから大阪の想定外の話を知り、農民運動に参加するきっかけの多様さや、自分の知らないことが人生に多くあることを知った。それにより、人の経験をまるごと受けとめることが必要と考えた。その後、山梨県では「人生を聞く」ことで「世代」という視点を得られた。一見、回り道に見えても、「人生を聞く」ことで、筆者は農民運動参加者を比較する可能性を広げることができたのである。(298字)</p> <p>問2 (出題の意図) 別紙</p> | |